



地人館 E-books  
Compact 5

デモ版 pdf

道元禅師の主著『正法眼蔵』の  
精髓をまとめた近代の聖典

# 修証義

[曹洞教会修証義]

❖原文と現代語訳

田中治郎 訳・解説



## 【扉】

元信・出山釈迦図（模写・部分）

釈迦仏が苦行を修した山を出て、巷に向かう場面。『修証義』でも説かれているように、世間の人々とまじらうことを重視する禅宗寺院でよく見られる。

東京国立博物館蔵

ColBase (<https://colbase.nich.go.jp>)



地人館 E-books  
Compact

---

## 田中治郎 (たなか じろう)

---

1946 (昭和 21) 年 宮城県生まれ

文筆家。日本ペンクラブ会員

横浜市立大学卒業後、出版社に勤務して主に児童書、仏教書の編集に携わる。現在は、仏教書、エッセイ、小説などの執筆や講演活動にあたる。[主な著書] 『世界の地獄と極楽がわかる本』『折れない心をつくる名僧の言葉』(PHP 研究所)、『よくわかる仏教入門』『コミュニケーション力がUPするブツダの言葉』(佼成出版社)、『面白いほどよくわかる日本の宗教』『面白いほどよくわかる日本の神様』『面白いほどよくわかる浄土真宗』『仏教のことが面白いほどよくわかる本』『釈迦の教えが面白いほどよくわかる本』(中経出版)、『生き方を学ぶ仏教入門』『禅の言葉100』『歎異抄◆原文と現代語訳』『親鸞入門』(地人館 E-books) ほか多数。

---

## しゅしやうぎ 修証義

---

著者 たなかじろう 田中治郎

初版発行 2022 年 5 月 20 日

発行 ちじんかん 地人館

〒 116-0014 東京都荒川区東日暮里 6-56-6 長戸ビル 3 階

Tel 03-6806-7937 Fax03-6806-7939

<http://chijinkan.com>

©2022 Jiro Tanaka

## はじめに

『修証義』<sup>しゆしやうぎ</sup>は、いわば曹洞宗<sup>そうとうしゆう</sup>の所依<sup>しよえ</sup>の經典である。曹洞宗の法会<sup>ほうえ</sup>に参ずると、『修証義』の小冊子を手渡されて読誦<sup>どくじゆ</sup>することが多い。現に、本書で使用した原本は、著者がある曹洞宗寺院の法会でいただいてきた曹洞宗宗務庁出版部発行のそれである。

曹洞宗の開祖である道元禪師には、「正法眼蔵」<sup>しやうぽうげんぞう</sup>九十五巻という大著があり、道元<sup>だげん</sup>の思想がちりばめられている。『修証義』は、いわばこの「正法眼蔵」のダイジェスト版といえるであろう。『修証義』の一言一句は、「正法眼蔵」から引用されている。実に要領を得てまとめられており、難解な「正法眼蔵」より格段にわかりやすい。道元の思想に近づこうとするものには、最良の道しるべといえるであろう。

新時代を迎えた明治期、宗門は在家信者に対して曹洞宗の思想を指導する必要があった。このため、明治二十一年（一八八八）に『洞上在家修証義』<sup>どうじやうざいけしゆしやうぎ</sup>が編纂された。天台出身の仏教思想家、大内青巒<sup>おうちせいらん</sup>（一八四五〜一九一八）がまとめたものである。

翌明治二十二年十一月、曹洞宗宗議会が開かれ、『洞上在家修証義』を改訂し、宗門の宗

意書としてこれを採用することが決まった。そこで、永平寺六十三世たきやたくしゅう滝谷琢宗（一八三六～一九〇七）と総持寺独住二世あせがみほいせん畔上棟仙（一八二五～一九〇一）という二大本山貫首の監修によってこの改訂が行われ、『曹洞教会修証義』が編纂された。これがいわゆる『修証義』であり、本書で採用させていただいたものである。五章三十一節より成る。

本書を訳出するにあたっては、なるべく原文を生かしつつつかつわかりやすさを追求したいと思ったが、至らない点も多くなった。ご寛恕いただきたい。読者の資料に資すれば幸いである。

田中治郎

【修証義】もくじ

はじめに

第一章 総序そうじよ 第一節～第六節

第二章 懺悔滅罪さんげめつざい 第七節～第十節

第三章 受戒入位じゆかいにゆうい 第十一節～第十七節

第四章 発願利生ほつがんにりしやう 第十八節～第二十五節

第五章 行持報恩ぎやうじほうおん 第二十六節～第三十一節

# 第一章

## 総序そうじよ

### 第一節

#### 【原文】

生しやうを明あきらめ死しを明あきらむるは仏家ぶつけい一大事いちだいじの因縁いんねんなり、生死しやうじの中に仏ほとけあれば生死しやうじなし、但ただ生死しやうじ即すなわち涅槃ねはんと心得こころえて、生死しやうじとして厭いとうべきもなく、涅槃ねはんとして欣ねごうべきもなし、是時このとき初めて生死しやうじを離はなるる分ぶんあり、唯一ただい大事だいじ因縁いんねんと究尽くわうじんすべし。

#### 【現代語訳】

生せい（の意味）を明らかにし、死（の意味）を明らかにすることは、仏教に携たづなわる者にとつて最も大事な要因よきんといえる。

（生死しやうじとは苦しみの世界に輪廻りんねを繰り返すわれわれの現実であるが、）その生死しやうじに関わる真理を仏の智慧によつて悟れば、生死の苦しみはやむ。こうして生死はすなわち涅槃ねはん（安らぎの世界）

とイコールなのだと思得れば、生死を厭う必要もなく、また（逆に）涅槃を請い願う必要もなくなる。

このように体得できたとき、（私たちは）初めて苦しみの生死の世界を離れることができるし、仏教を学ぶ最も大事なモチベーションを得たと考えて、これを究め尽くすべきである。

## 第二節

### 【原文】

人身得ること難し、にんしんう 仏法値うこと希れなり、ぶつぽうお 今我等宿善の助くるに依りて、いまわれらしゆくぜん 已に受け難き人がた 身を受けたるのみに非ず、しん 遇い難き仏法に値い奉れり、あ 生死の中の善生、しやうじ 最勝の生なるべし、さいしやう 最勝の善身を徒らにして露命を無常の風に任すること勿れ。しやうぜんしん いたず ろめい むじやう かぜ まか な な

### 【現代語訳】

人間として生まれることはめったにあることではなく、仏の教えにめぐり会うことも希れなことである。